

第 5 章 酸性雨調査結果

第5章 酸性雨調査結果

化石燃料などの燃焼により大気中に排出された硫黄酸化物や窒素酸化物などが、雲粒に取り込まれ、そこで硫酸イオンや硝酸イオンなどに変化して、pHの低い雨や雪などの形態で地表に沈着するものを酸性雨と呼んでおり、その状況が深刻化すれば、森林消失や湖沼生物など生態系へ影響を与える。

このため、本県では、降水の性状を明らかにし、併せて酸性雨発生機構解明の基礎資料を得て酸性雨対策に資するため、昭和58年度から石川県における降水の化学組成の調査を実施してきた。

なお、酸性雨は大陸からの影響もある広域的な大気汚染であるため、全国環境研協議会の全国共同調査に参画し、行政区域を超え、地域的な評価も実施している。

1 調査目的

降水中に存在する各種イオン成分を測定することによって、雨の化学成分組成、イオンバランス等を明らかにし、酸性雨発生機構解明の基礎資料を得ることを目的とする。

2 調査地点及び調査期間

調査地点及び調査期間は表5-1のとおりである。平成23年度は太陽が丘測定点（金沢市）1地点で通年調査を実施した。

表5-1 調査地点

調査地点	所在地	設置場所	区分	調査期間
太陽が丘	金沢市太陽が丘 1丁目11番地	石川県保健環境センター 屋上	1週間降水	平成23年3月28日～ 平成24年3月26日

3 調査方法

(1) 1週間降水の採取方法

自動降水採水器を用いて、原則月曜日毎に1週間分の降水を採取した。

(2) 測定項目及び測定方法

表5-2のとおり10項目を測定した。

表5-2 測定項目及び測定方法

区 分	測 定 項 目	測 定 方 法
1週間降水	水溶性成分	
	pH	ガラス電極法
	EC (電気伝導率)	電気伝導率計による方法
	SO ₄ ²⁻ (硫酸イオン)	イオンクロマトグラフ法
	NO ₃ ⁻ (硝酸イオン)	〃
	Cl ⁻ (塩化物イオン)	〃
	NH ₄ ⁺ (アンモニウムイオン)	イオンクロマトグラフ法
	Ca ²⁺ (カルシウムイオン)	〃
Mg ²⁺ (マグネシウムイオン)	〃	
K ⁺ (カリウムイオン)	〃	
Na ⁺ (ナトリウムイオン)	〃	

4 調査結果

1週間降水のpH、EC及び降水成分分析結果は、表5-3のとおりであった。

pHの範囲は3.90～5.57、平均値4.57であり、これまでの最低値が観測された平成19年度の平均値4.31を上回っていた。また、平成22年度における全国平均値^{注)}4.82に比べて、低い値であったが、植物に対する急性被害が懸念されるpH3未満の降水は観測されなかった。

また、降水酸性化の指標である非海塩由来硫酸イオン(nss-SO₄²⁻)濃度は16.6 μmol/L、硝酸イオン(NO₃⁻)濃度は19.1 μmol/Lであり、前者は平成22年度における全国平均値^{注)}11.0 μmol/Lの1.5倍、後者は全国平均値^{注)}13.7 μmol/Lの1.4倍であった。

なお、本調査は、全国環境研協議会酸性雨調査研究部会が実施する精度管理調査に参加し、信頼性の確保を図るとともに、個々の測定値についてもイオンバランスの検定、電気伝導率の計算値と実測値を比較し、測定データの検証を行っている。

表5-3 pH、EC及び降水成分濃度の概要

項目	平成23年度調査結果		
	年平均値 ²⁾	週最高値	週最低値 ³⁾
降水量 ¹⁾ (mm)	2,907.5	228.9	1.2
pH	4.57	5.57	3.90
電気伝導率 (EC) (μS/cm)	32.3	105.2	0.5
硫酸イオン (SO ₄ ²⁻) (μmol/L)	22.4	109.5	1.3
硝酸イオン (NO ₃ ⁻) (μmol/L)	19.1	212.3	1.2
塩化物イオン (Cl ⁻) (μmol/L)	108.2	428.9	0.0
アンモニウムイオン (NH ₄ ⁺) (μmol/L)	16.0	162.5	1.7
カルシウムイオン (Ca ²⁺) (μmol/L)	5.5	78.2	0.2
マグネシウムイオン (Mg ²⁺) (μmol/L)	11.2	48.4	0.0
カリウムイオン (K ⁺) (μmol/L)	3.6	12.2	0.3
ナトリウムイオン (Na ⁺) (μmol/L)	97.3	438.2	2.6
水素イオン (H ⁺) (μmol/L)	27.2	125.9	2.7
非海塩由来硫酸イオン (nss-SO ₄ ²⁻) (μmol/L)	16.6	103.4	1.2
非海塩由来カルシウムイオン (nss-Ca ²⁺) (μmol/L)	3.4	76.1	0.0

- 注) 1 降水量は、降水採取器の貯水量から換算した値であり、年平均値欄の数値は年間集計値である。
 2 年平均値については、pHは、水素イオン濃度に換算した上で降水量(貯水量換算値)重み付き算術平均値、その他の項目は降水量(同)重み付き算術平均値である。
 3 非海塩由来硫酸イオン(nss-(non sea salt)SO₄²⁻)とは、海塩由来のSO₄²⁻を除いたSO₄²⁻濃度を示す。

$$[nss-SO_4^{2-}] = [SO_4^{2-}] - 0.060 [Na^+] \quad (\text{海塩中の } SO_4^{2-}/Na^+ = 0.060) \quad (\text{単位はモル濃度})$$

 4 非海塩由来カルシウムイオン(nss-(non sea salt)Ca²⁺)とは、海塩由来のCa²⁺を除いたCa²⁺濃度を示す。

$$[nss-Ca^{2+}] = [Ca^{2+}] - 0.0216 [Na^+] \quad (\text{海塩中の } Ca^{2+}/Na^+ = 0.0216) \quad (\text{単位はモル濃度})$$

注) 「平成22年度酸性雨調査結果について」環境省ホームページより引用した。

5 経年変化

(1) pHの変化の状況

pHについて、1週間降水の年平均値、最低値及び最高値の経年変化を表5-4に、年平均値の推移を図5-1に示した。

図5-1からは、観測を開始した昭和58年度から平成12年度に比べ、平成13～19年度はpHが低下傾向、平成20～21年度はpHが上昇傾向であったが、平成22年度以降は横ばいである。また、日本海側における他の測定点(新潟、新潟巻)と比較すると変動傾向は似ているが、近年はこれらの地点より、pHがやや低めに推移する傾向であった。

本県においては、現在のところ酸性雨による深刻な被害を受ける状況には至っていないが、大陸方面からの大気汚染物質の長距離輸送の影響も懸念され、気象要因による変動等も考慮し、今後とも推移を注意深く観察する必要がある。

表5-4 一週間降水のpH(年平均値、最低値及び最高値)の経年変化

年度	金 沢				測定点
	年平均値 ^{注1)}	最低値	最高値	降水量(mm) ^{注2)}	
昭和 58	4.73	4.4	6.7	2,936	三 馬
59	4.71	4.0	6.1	2,198	〃
60	4.65	4.1	6.3	3,380	〃
61	4.54	4.2	6.5	2,047	〃
62	4.63	3.7	5.7	1,982	〃
63	4.74	4.2	6.5	2,758	〃
平成 元	4.62	4.1	5.6	2,754.8	〃
2	4.72	4.1	5.2	3,092.2	〃
3	4.53	4.03	6.11	1,821.8	〃
4	4.54	3.94	5.99	2,015.0	〃
5	4.68	3.87	7.02	2,790.4	太陽が丘
6	4.58	4.18	6.67	1,891.1	〃
7	4.62	4.00	6.52	2,676.6	〃
8	4.61	3.86	6.61	2,215.1	〃
9	4.63	3.94	7.39	2,659.8	〃
10	4.71	4.24	6.37	3,068.5	〃
11	4.62	4.13	6.26	2,785.7	〃
12	4.60	4.04	7.33	2,336.5	〃
13	4.50	3.93	7.54	2,761.1	〃
14	4.52	3.84	5.30	2,827.1	〃
15	4.47	4.01	5.20	2,685.6	〃
16	4.51	4.08	5.21	2,867.8	〃
17	4.39	3.71	6.63	2,733.8	〃
18	4.51	3.63	5.66	2,715.4	〃
19	4.31	3.73	5.18	2,364.7	〃
20	4.48	4.00	4.98	2,431.9	〃
21	4.58	3.83	7.27	2,552.5	〃
22	4.61	4.04	5.49	2,984.9	〃
23	4.57	3.90	5.57	2,907.5	〃

注) 1 年平均値は、水素イオン濃度換算後の貯水量重み付き算術平均値である。

2 降水量は、降水採取器の貯水量から換算した値であるが、昭和58～61年については、最寄の気象官署及びアメダスに基づく降水量である。(石川県衛生公害研究所年報第26号 p.89-108 参照)

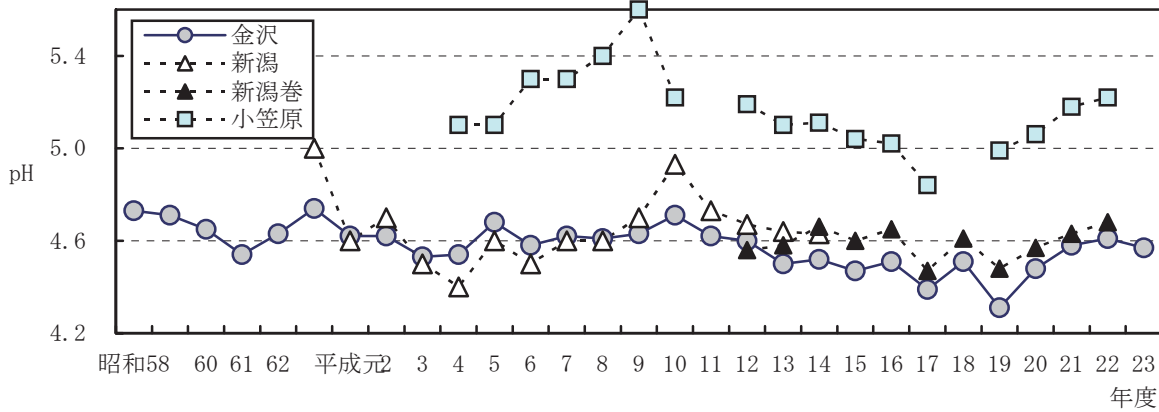


図5-1 1週間降水のpH(年平均値)の推移

- 注) 1 新潟、小笠原(H4-H14)のデータは「酸性雨対策調査総合とりまとめ報告書」酸性雨対策協議会(平成16年6月)から引用した。
 2 新潟巻、小笠原(H15-H19)のデータは「酸性雨長期モニタリング報告書」環境省(平成21年3月)から引用した。
 3 新潟巻、小笠原(H20-H22)のデータは、環境省HP酸性雨対策調査のモニタリングデータから引用した。

(2) 降水成分の変化の状況

平成14～23年度の降水成分濃度は、表5-5のとおりであった。

過去10年間の経年変化をみると、湿性沈着の酸性化の指標である非海塩由来硫酸イオン($nss-SO_4^{2-}$)濃度及び硝酸イオン(NO_3^-)濃度は、多少の変動はあるものの、ほぼ横ばい傾向である。また、酸性化を抑制する指標とされているアンモニウムイオン(NH_4^+)及び非海塩由来カルシウムイオン($nss-Ca^{2+}$)濃度も、ほぼ横ばい傾向である。

表5-5 降水成分濃度(年平均値)の経年変化

項目	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23
降水量 (mm)	2,827.1	2,685.6	2,867.8	2,733.8	2,715.1	2,364.7	2,431.9	2,552.5	2,984.9	2,907.5
pH	4.52	4.47	4.51	4.39	4.51	4.31	4.48	4.58	4.61	4.57
SO_4^{2-} ($\mu mol/L$)	27.3	27.8	25.7	33.8	27.9	31.4	26.5	22.9	24.6	22.4
NO_3^- ($\mu mol/L$)	18.2	22.3	18.4	25.6	21.8	27.7	20.8	17.5	21.8	19.1
Cl^- ($\mu mol/L$)	165.3	156.0	132.6	150.0	130.4	131.1	149.3	112.2	142.5	108.2
NH_4^+ ($\mu mol/L$)	20.6	20.8	16.2	24.2	19.9	24.9	18.9	16.0	18.4	16.0
Ca^{2+} ($\mu mol/L$)	7.2	7.1	6.7	9.4	8.5	9.0	6.9	8.7	8.2	5.5
Mg^{2+} ($\mu mol/L$)	17.5	16.2	14.4	15.8	13.6	13.7	14.5	11.6	14.9	11.2
K^+ ($\mu mol/L$)	4.8	4.6	2.8	4.0	4.0	3.8	3.5	3.2	3.9	3.6
Na^+ ($\mu mol/L$)	138.3	138.0	114.9	132.4	117.3	118.2	129.2	102.9	126.3	97.3
H^+ ($\mu mol/L$)	30.5	34.0	30.9	40.3	30.8	49.3	33.5	26.2	24.6	27.2
$nss-SO_4^{2-}$ ($\mu mol/L$)	19.0	19.4	18.8	25.8	20.8	24.3	18.8	16.7	17.0	16.6
$nss-Ca^{2+}$ ($\mu mol/L$)	4.2	4.1	4.2	6.5	6.0	6.4	4.1	6.5	5.4	3.4

平成 19～23 年度における月別の非海塩由来硫酸イオン (nss-SO_4^{2-})、硝酸イオン (NO_3^-)、非海塩由来カルシウムイオン (nss-Ca^{2+}) 及びアンモニウムイオン (NH_4^+) の濃度の変化は、図 5-2 から図 5-5 のとおりである。

いずれの成分も夏季に濃度が低く、冬季を迎える 11 月頃から上昇し、2 月から 5 月にかけて最も濃度が高くなる傾向である。平成 23 年度については、これまでの傾向と同様であった。

酸性化の指標となる成分の推移については、気象要因による変動を考慮しながら、今後とも継続して調査を続けていくこととしている。

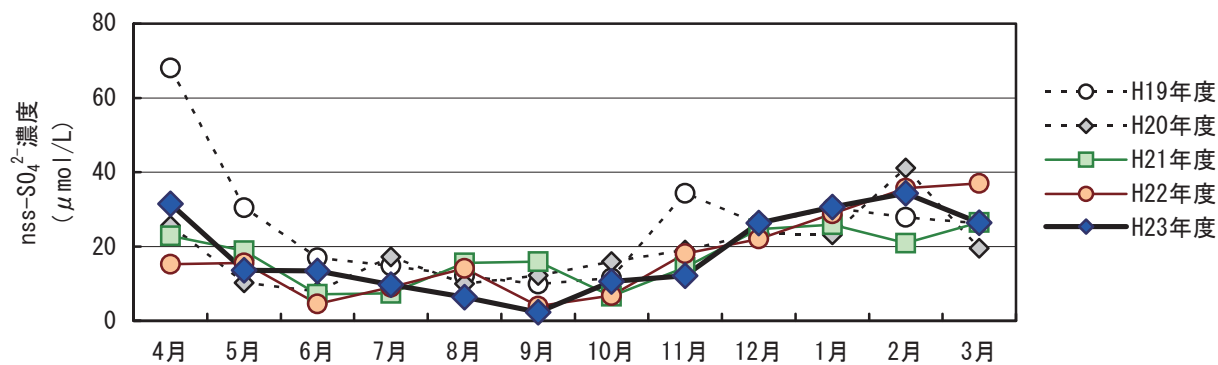


図 5-2 月別 nss-SO_4^{2-} 濃度

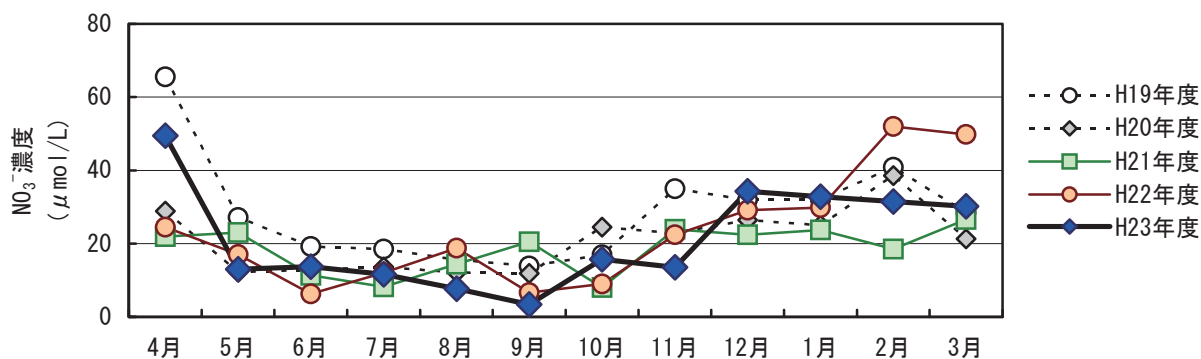


図 5-3 月別 NO_3^- 濃度

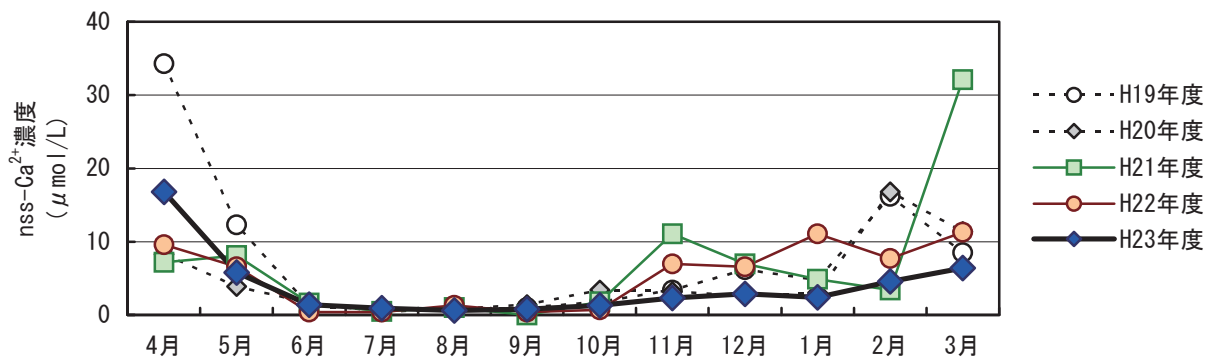


図 5-4 月別 nss-Ca^{2+} 濃度

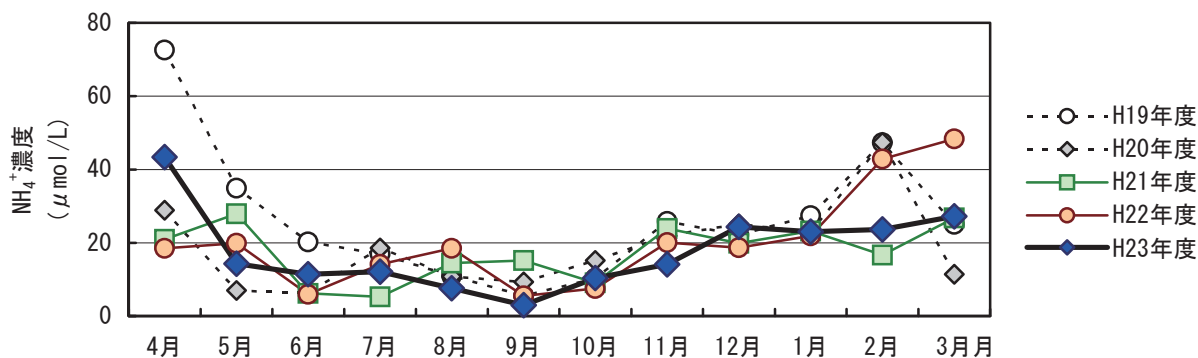


図5-5 月別NH₄⁺濃度

6 その他の酸性雨影響調査

環境省が実施している土壌・植生モニタリング調査は、白山国立公園（白山市）、石動山（中能登町）及び宝立山（輪島市）の3地点において、平成元年度から（白山国立公園は平成15年から）概ね5年に1度の頻度で継続的に実施されている。平成21年3月酸性雨長期モニタリング報告書においては「石動山、宝立山で土壌中のpH（KCl）の低下がみられ、土壌中の酸度の上昇が示唆されたが、酸性沈着や土壌酸性化が主原因と断定される衰退木など明確な影響は確認されていない。」とされている。

また、環境省の陸水モニタリング調査は、平成15年度から大畠池（倉ヶ岳大池：金沢市、白山市）で毎年、継続的に実施されている。これまでの調査結果について、同報告書では「酸性沈着の明確な影響は確認されなかった」とされている。

なお、これまでの調査結果の概要は次のとおりであり、本県では引き続き、これら環境省の実施する調査に協力していくこととしている。

表5-6 大畠池の水質

（単位：pH及びECを除きμmol/L）

年度	pH	EC (μS/cm)	アルカリ度	SO ₄ ²⁻	NO ₃ ⁻	Cl ⁻	NH ₄ ⁺	Ca ²⁺	Mg ²⁺	K ⁺	Na ⁺
H15～ H19	6.53	42.9	134	33.5	8.6	186.5	2.5	65.0	70.1	25.8	197.1
H20	6.73	44.6	140	39.1	8.9	194.6	3.3	56.4	84.7	27.1	197.9
H21	6.67	43.8	133	36.6	9.7	181.4	6.1	60.9	73.2	27.6	193.6
H22	6.73	46.6	141	36.2	12.6	185.0	0.0	67.4	74.8	28.6	202.3

注) 1 H15～H19のデータは「酸性雨長期モニタリング報告書(平成15～19年度)」環境省(平成21年3月)より引用した。
2 H20～H22のデータは、環境省の「平成20年度及び21年度酸性雨対策調査について」のうち陸水モニタリングデータを引用し、単位換算を行った。

表5-7 石動山の土壌（表層・適潤性褐色森林土）

（単位：水分含有量及びpHを除き cmol(+)/kg）

年度	水分含有量 (wt%)	pH		交換性陽イオン（塩基性）				交換性 酸度	交換性陽 イオン（酸性）	
		H ₂ O	KCl	Ca	Mg	K	Na		Al	H
H13	5.0	4.4	3.7	0.36	0.37	0.44	0.18	13	12	1.4
H17	8.3	4.4	3.5	0.48	0.74	0.33	0.11	13	12	1.0
H22	6.5	4.3	3.5	0.76	0.86	0.31	0.13	12	11	1.0

注) 上記データは「平成22年度酸性雨長期モニタリング（土壌・植生）報告書（平成23年3月）」より引用した。

表5-8 宝立山の土壌（表層・弱乾性赤色土）

（単位：水分含有量及びpHを除き cmol(+)/kg）

年度	水分含有量 (wt%)	pH		交換性陽イオン（塩基性）				交換性 酸度	交換性陽 イオン（酸性）	
		H ₂ O	KCl	Ca	Mg	K	Na		Al	H
H13	5.5	4.6	3.8	0.49	0.78	0.40	0.35	16	14	2.0
H17	11.8	4.6	3.6	0.30	1.0	0.23	0.16	16	16	1.1
H22	8.6	4.3	3.4	0.89	1.4	0.28	0.22	13	12	0.98

注) 上記データは「平成22年度酸性雨長期モニタリング（土壌・植生）報告書（平成23年3月）」より引用した。